









---

あつた実朝の、いわばポテンシャルを計測することへと、翻つて関心が向かうことにもなるのである。昭和四年に発見紹介された、『金槐和歌集』の圧倒的な古写本である、いわゆる「定家所伝本」の『金槐和歌集』の精密な読解はこれからも続けられなければならない。

我々は実朝の虚像の持つ意味を冷静に見つめつつも、同時に実像への追究を諦めてはならない。歴史と文学史に深く関わつた実朝を問うことは、歴史や文学史を改めて問い返すことになるからだ。虚像と実像を往還する、粘り強い視線の先に、新たな実朝像も立ち現れるだろう。本特集の表題に、「虚実を越えて」の副題を付した所以である。

SAMPLE